會員通信

苫東—石狩湾

斎藤禎男

札幌から苫小牧へ転勤して、間もなく六カ月が過ぎます。『あそこだけは二度と行きたくない』—こんな送別の言葉もちょうだいしての転勤でしたが、住めば都です。周囲の小学生たちに触発されてA・タラソフ著「アイスホッケー入門」を読み、小学三年の長男と王子スポーツセンターへ足を運んでいます。

王子製紙、岩倉組というビッグ・チームを育てあげた苫小牧ですが、市民構造は変わりました。土地の人たちが〃現苫〃と呼んでいる苫牧工業港ができる以前と現在の人口を比較してみますと、王子製紙や岩倉組とかかわりのない新市民の増加が目立ちます。紙の街・苫小牧に昔から住んでいる人たちを旧市民としてみれば、新市民六万人、旧市民七万人と、分けることができます。大ざっぱな表現をすると、およそ半数の市民が、他都市からの転入市民ということになります。

多くは道内都市からの転入ですが、こうした市民構造の中で争われた今春の苫小牧市長選で、社会党から離れた市長が当選したことは興味深いことです。それは、日本の大プロジェクトといわれる苫東開発を争点として争われたからです。五月になって公明党市議団が三千人を対象としたアンケート調査を実施しましたが、回収率九三%で苫東開発賛成が六三%、反対二二%、無回答一五%と出ました。

都市をどうする——この問題の判定者はその都市に住んでいたい人たちにゆだねられるべきです。私を含めて流れ者には、判定者の資格はありません。ところが、選挙の結果やアンケート調査では〃苫小牧に住んでいたいかどうか〃を読みとることはできません。そこで、昔から苫小牧に住んでいる旧市民七万人を〃住んでいたい〃人たちととらえ、選挙とアンケート調査を判断すると、苫東開発は、苫小牧市民によって認知された、ということができます。アルミサッシュの普及が日本に初めて住居に気密性をもたらしたといわれます。実際、アルミサッシュ窓のはいった住居で生活してみれば、このことはよく理解できるわけですが、快適な生活はアルミサッシュがもたらしたものだ、と形容する都市問題の専門家もいるほどです。そのアルミサッシュ窓わくは、アルミ工場があるから製造できるわけです。話を短絡しますと、アルミ工場が快適な生活をもたらした、ということになります。

ところが新聞がとりあげる〃公害〃の多くは、こういう組み立てではありません。快適な生活は、市民の権利であり、アルミ工場は海洋汚染の原因者だからけしからん—という形をとっています。それではアルミサッシュの窓わくはやめて木の窓わくでこれまで通り、騒音の中で生活するか、といえば、そうではありません。今度は騒音公害といいます。最近は〃二者択二〃がまかり通る、といわれますが、実際は、まかり通っているわけではありません。新聞をみていると、あたかも、まかり通っているように見えるに過ぎないのです。

自然環境の保全は、もともと自動車文化やTV文化といわれる便利さの追究とは背中合わせのものです。その二つともを実現させようとすれば、どこかで調整しなければなりません。苫小牧で今夏、ヤブカが大量発生しました。取材に出かけて、久しぶりに〃かゆさ〃を味わいましたが、BHCやDDTを使用しなくなってから数年が経過していることを考え合わせますと、ヤブカに限らず虫たちの復権は当然のことと考えられます。自然保護とは、〃かゆさ〃程度は、がまんするという意味ではないでしょうか。

河野広道博士が昭和二十三年に〃北海道の開発は何から始めるべきか〃という文章を書きました。実は苫東開発も、石狩湾新港も、この中で提案されていることなのです。博士は石狩湾と苫小牧を結ぶ石狩低地帯に運河を発掘し、石狩と苫小牧に大工業港を建設する。運河の規模は五千トン級の船舶を通したい。第一次工事としては江別—苫小牧の運河開掘—など具体的な提案をしています。同じころ中谷宇吉郎博士は雪資源開発と原子力発電を中心とした〃役に立つ科学〃について提案をたくさんしています。

ところが〃ドブに捨てた八百億円論〃だけが取り上げられます。これは、北海道総合開発批判なのですが、方法が間違っている。科学が役に立っていない。非科学だといった趣旨の開発批判であって、開発否定

ではありません。開発に対するものの考え方は、中谷博士の選集を読まれればわかりますので紹介ははぶきますが、問題なのは〝ドブ論〟だけをとりあげて〝役に立つ科学〟など、その他のたくさんの提案をとりあげないことです。これは、その論文を選ぶ側に、ある種の意図が働いているためでしょう。

河野博士が提案した苫小牧大工業港建設は、いま第二期工事としての苫東港にかかろうとしています。これが軌道に乗れば、石狩湾新港建設という段どりになるわけですが、ここで海浜の使い分けを提案したいのです。具体的にいえば、海浜植物や砂丘のある部分を残してほしいのです。汀線から幅一キロの帯状海浜は手をつけるな―ということです。船舶には岸壁が必要です。その岸壁を、もっと内陸にもってくることは可能ですし、現苫の人工港が、その見本です。現苫では、肝心の海浜スペースも企業に譲り渡したために、市民は海浜を奪われる格好になりました。

これと同じことを石狩湾新港でやったら大変です。積丹半島から、厚田・浜益方面へかけての海浜は、ざっと四十キロあります。夏の二カ月間、この海浜に、海水浴に出かける市民は延べ三百万人を数えます。この海浜を奪ったら、一体どういうことになるでしょう。必ず空間補償を求める市民運動が起きるでしょう。苫小牧の海は、つめたく海水浴ができませんから、この種の問題は起きていないだけなのです。人間ばかりではありません。ミズナギドリなどの海鳥の休息場になったり、海浜にはいろいろな機能があります。ですから苫東も石狩湾新港も海浜スペースは、生物のための空間として明け渡してほしいのです。

（北海タイムス苫小牧支社）

スキー場で夏を楽しむ

百武充

昨年七月の転勤で阿寒国立公園の川湯に移り、ほぼ十年ぶりに都会から離れた生活をはじめた。最初の夏は着任早々であったために余裕もなく終ってしまったが、今年は幾分か自然を見廻すゆとりが持てた。特に自宅から徒歩三分の距離にあるスキー場ではずいぶん楽しんだ。近くのアカエゾマツの立枯木数本が伐採され、玉切りされてしばらく、ゲレンデの下部に積まれてあったので、それにいろんな甲虫が集まってきた。ハイイロハナカミキリやシラフヒゲナガカミキリなどのカミキリムシ類が多く、コメツキムシ、タマムシ類もいた。また周辺に次々と咲くマーガレットやノリウツギやヨツバヒヨドリにはこれまた多くの甲虫やチョウが訪れるので、私は好天の日の昼休みや土曜日の午後にせっせとスキー場に通い、小さな生きものたちの営みを眺めて嬉しがった。

そのように足繁く行っていると、たとえば同じノリウツギでも花の咲きはじめと終わりとでは集まる昆虫の種類も数も変化があるようで　三、四日間を置くと虫たちの集まる花が移ってしまうのが、よくわかった。

道庁勤務時代、大麻団地で暮していたときには、月に一回か二回、野幌森林公園を歩いて野幌の自然がわかったような気持になり、年に二、三回大雪山に登っては、大雪山とだいぶ親しくなったように考えていた。しかし今年のように自然の日毎の変化を目のあたりにすると、私が見ていない間に野幌の森でいかに多くの変化が生じていたかがいやでも想像されて、理解していたと信じていた自分がほんとうに恥ずかしくなってきた。

むかし尾瀬に住んでいたときにはそのような毎日の自然の移りを見ていたことも思い出された。都会生活の間にそのことを忘れていたわけである。今度はしっかりと記憶しておこう、と決心したことであった。

最後に、あえて教訓めいたことをいうなら、自分が毎日接することのできる自然が一番多くのことを教えてくれる。だから都市近郊など、身近な自然をたいせつにしなければならない、ということになろうか。

（環境庁・阿寒国立公園管理事務所）

偶感

原田輝治

最近の自然保護協会の機関誌は、読ませるものが多くなったように思います。会員の幅の広さが伺われ、なによりも編集者の熱意が感じられてくる思いです。しかし、協会の運動のなかで、機関誌が充実している反面、具体的な問題に対する提言がいまひとつ説得力に欠けているのでないでしょうか。自然保護とは、総合科学あるいは境界領域の学問といわれています。それゆえに、百年一日のごとく自然保護とは何かが問われ、体系的な理論が確立されないので

しょう。

現在そうした理論を作り上げる努力は、学問的には素人でも自然の保護に情熱を傾けている人々によってなされているように思います。しかし、自然保護が学問のどの分野にも関連し、どの分野にも属さないからこそ、あらゆる分野の研究者を会員に持つ自然保護協会に、研究者集団としての能力の発揮を期待したいのです。

北海道のトップレベルの研究者が集まって作成した問題提起や提言に、説得力に欠けると私が感じるのは、動物や植物など個別の分野については最高のものでありながら、自然を解明するに当たって、それら相互の関連が不明確な点にあるように思います。また、社会的、経済的な分析があまり見られません。

こうした苦情は、じつは自然保護行政に携わりながら、私自身がかかえている問題にほかならないのです。多くの会員の持てる力を十分に引き出す場を日常的に創り上げ、科学的で説得力に富んだ理論を確立することに切に望みます。

（北海道生活環境部自然保護課）

黄色い線

橋場文俊

もう一年ほど前から、中山峠の国道は定山渓の出口から喜茂別町川上地区にいたるまで、えんえん三〇km以上の黄色い線が引かれている。もちろん追越し禁止のラインである。私はこの交通安全対策に、不平を書こうとしているのではない。交通事故者の手当にあたっている喜茂別の病院に勤務しているものなのだから。

ただ全山を黄色い線を引けば事たれりとする警察当局に、一考してもらいたいのである。それは自然保護の観点からも、重要な問題をはらんでいるからである。

普通、乗用車が一分間に消費する酸素の使用量は、一人の人間が一年間に消費する酸素量とほぼ同じである。中山峠を四〇kmに制限し黄色い線を引いてもらったおかげで、この状態がつづけば、この道路の沿線にある樹木が、一〇年後にはみな枯れてしまうのは確実である。おそろしいことである。

排気ガスが自然に及ぼす悪影響は、全国各地からいろいろ報告されているが、排気ガスを完全に処理する方法は、いまの自動車の形と機能からは不可能なことである。そうすれば、その被害を最少限度にとどめる必要があるのではないか。

ことしの春、中山峠でドライバーが起こした殺人事件は、追越しが原因であり、長時間のいらいらがこの事件を引き起こしてしまった。これは、人間の精神衛生を考えずに全山を黄色い線で書きなぐった当局の責任ではないか。私もこの道を利用するがパトカーがいて前を大型の荷物車がゆっくりとのぼっていっても、その車に対して、まったく指導をしているのをみたことがない。良識あるものであれば、低速車は左に寄りなさいと指導して、えんえんとつづく自動車を通し、交通の流れを円滑にするのが仕事であろう。パトカーは、違反者だけをつかまえるものではないはずである。数キロに及ぶ車の列から排出するエキゾーストが、空気の色すら変えることを経験している。

中山峠の紅葉もここ数年めっきり色あせてしまった。樹木を枯らすということが、いかに大変なことなのか、よく考えてほしい。各方面の意見を卒直に聞いて適切な処置をしていただきたい。独断的な交通行政で人びとの反感を買っては大変である。

（喜茂別厚生病院）

自然保護講演会を聞いて

竹内恒夫

昭和三十年後半からの高度経済成長がもたらした過密・過疎の地域現象が賑々しく論ぜられたのは、昭和四十年代の前半であった。アンバランスの地域構造は、健全な日本の将来を見極めるうえで由々しき社会的現象であるとされたものである。

だが昨今は〝開発か、自然保護か〟の論議が賑やかである。ちょっとした会合でも挨拶がわりに自然保護論がとびだし、「自然保護を語らずば人にあらず」の風潮さえ感じられる。もともと人間の自然保護観は地域の自然的環境と民族がそれにとり組んだとり組み方（開発）に応じ様々であり、一様のはずもない。欧米の自然保護観が日本に定着しなければならぬ理由もないし、必然性もないと考えている。だが、せっかちな日本人にとっては、それが三〇〇年も

の歴史の中で熟成して育ったものであることを銘記すべきであり、参考にはなるのだろう。

よくお天気と農業（文化）は西日本から北上するといわれるが、日本における自然保護論議もその例にもれず、西日本の二番煎じが若干時間がずれて本道に上った感じが深い。北海道のもつ自然的、社会、経済的条件が様々の特性を有するものであってみれば、北海道独自の自然保護観、開発論議があってもいいのではないだろうか。

「本道に開発が必要かどうか」「社会資本は十分投入されているのかどうか」「地域的に社会資本は均衡して投入されているのだろうか」過去の本道開発の方法論の吟味　分析をしながら、北海道を多角的に分析する必要がありそうだ。そう思っていた矢先、北海道自然保護協会主催の自然保護講演会を聞く機会を持ったので、当日の講演会で感じたものを記してみたい。

〃人と自然と〃というテーマで、講師はエベレスト滑降で著名なプロ・スキーヤー三浦雄一郎氏、

七月一五日、会場は札幌のSTVホールであった。

内容はアラスカの自然と少年探険隊、カナダの三浦一家の家族スキーのフイルム二本が上映され、それにまじえ約一時間、世界各地で得た実践的体験談を講演したものであった。

話の半分は教育問題であり、自然は貴重な精神的、肉体的、教育の場であること、特に子供にとって自然の果す教育の果す教育的効果などを強調していたのが印象的であった。また我田引水ではないが、二枚の板切れ（スキー）が最も自然との調和ある行動に適したものであることも忘れずに強調していた。

「しかし　人間が地球上で生存していくためには地球上の資源を喰いつぶしていくしかない。今後もいま以上の人口で喰いつぶしていくだろう。いくら口で自然保護を唱えても植物、動物、魚を殺して生きて生かねばならない人間は矛盾だらけの動物である。しかし、他の動物と異なり、唯一の救いは新しく物（資源）を創造する能力があることだ、人間の英智はその能力を最大限働かし、自然と調和し生きていくこと、これが自然保護の基本ではないだろうか」と熱っぽく結んでいた。

自然の回復力、再生能力の限界を見極めその中で手を加えて資源造成をはかるのが人間の英智というのであろう。さしずめ北海道の森林にも、このことは当てはまることであろう。このためには、社会資本と労働力の持続的集中的な投入が森林、および森林の存在する地域に投入されることが、必要条件となってくる。

これら前提のない自然保護論は過疎地域の住民と森林にとってみれば、なんと（実践のない）空しいものであろうか。自然保護とはそういうものなのであろう。

適正な森林施業は環境保全と資源造成につながるものであり、自然保護と表裏一体と考えるべきであろう。

公害に悩む都会が豊かさに挑戦するためにも、森林が多く社会資本の蓄積の少ない過疎地域が貧困から脱出するためにも社会資本は必要であろうが、現在の自然保護論の中にどちらが優先するかの論議が欠けているのが、最も気がかりなことではないだろうか」。

もう一歩進めば、現在の北海道全体が全国都府県の相対的位置の中で、豊かさへの挑戦という二次的開発の段階なのか、貧困からの脱出という一次的段階なのか、改めて考え直すところから開発と自然保護の論議は始まるべきではないだろうか。

（北海道林務部森林計画課）

北海道の観光
不況と自然

村本輝夫

過日、北海道観光連盟が主催した〃観光セミナー〃に参加して、これからのレジャーや観光のあり方などの話を聞く機会を得た。この種の会合に列席したことのない私には、話よりも先にどんな人たちが集まるのが興味が強かった。大多数は観光行政担当者、次いでホテル経営者、みやげ品関係者の人たちであった。

私は毎年、絵はがきを製作販売して生活している関係から、北海道の風景を正面からとり組む人種として他に類を見ないまでに、北海道の景観を考え、北海道観光の目玉がなんであるかの追求をつづけている。つまり、北海道に来たくなる要素、とりわけその風景美について考え、それを写真作品として観光客の共感を得ようというのである。

北海道を観光または単に旅行する本州客の目的は、風景を観ることのみではないだろうが、清いまでも美しく、おおらかな大

自然の景観にひたって、不愉快になるご仁はあるまい。あくせくとした日常の仕事や生活がつづく限り、レジャー利用の度合いは高くなると、諸先生方が申されておりました。

◇

今年の北海道の観光は、惨憺たるものであった。諸悪条件が重なりに重なって前年度を一五パーセントも下回ったようだし、みやげ店の売り上げも軒並みにダウン「在庫の山は残った」では、アッパーカットを喰ったようなものである。なぜこうもお客が減り、来たお客様でも買い物をしないでお帰りになったのか。

その答えとして北海道はあきられた、見離された、旅行する必要がなくなったと私はいいたい。その理由として、客を迎える態度がなっていない、サービスが悪い、うまい物を食べさせない、みやげ品も大したものなし、値打ちがない、だいいち大自然がちっともきれいではないではないかと、私はお客になったつもりで毒づいてみるのである。

これらは、すべて人為的結果である。私の最も関心の高い清いまで美しい風景は、どこへいってしまったのだろうか。深い緑の森、透明な湖水、花いっぱいの原野などそのままズバリ写真になるところがないではないか。山や丘は削られて赤土がむき出し、湖は汚れが流入して湖岸の玉石の輝きは失せ、空気にまで味つけされている。全く、北海道の自然は人間くさいものにされてしまった。

◇

来年は、今年のように「不況だから」をくり返して、営業不振に目をつぶるわけにもいくまい。諸悪の根源は種々あろうが、まずもって「清いまで美しい」北海道の風景——自然を再生せねばなるまい。おみやげは買わずとも、観光客に美しい自然と、おいしい空気を満喫してもらい、とにかく北海道に来てよかった、という印象を持ってもらおう。交通費、宿泊費の代償がその印象で得られ、お釣りがあったらおみやげを買ってもらおう。

わが生活の痛さから、北海道の自然の、本来の自然性の必要を痛感する今日このごろである。

（北海道撮影社）

(一) アポイ岳山頂の人里植物オオバコ

森田弘彦

今年の七月六日、待望のアポイ岳登山を果たした。目的は、もちろんアポイ岳特産として知られるアポイアズマギク、アポイタチツボスミレ、アポイカンバ、エゾコウゾリナ等々をこの目で見ることであった。アポイ岳の植物についてはすでに〝様似町文化協会北方植物研究会〟が編集し、様似町で発行した「アポイ岳の高山植物」という、立派な案内書がある。この小冊子の末尾の参考文献にも明らかなように、アポイ岳の植物は蛇紋岩地帯の特異な植生という点で、さまざまな角度から研究されてきている。

アポイ岳はわずか八二一メートル、しかも海岸に接した低い山で、いろいろな高山植物が見られるために登山者の数は多い。こうした多数の登山者による植生の破壊や変化は、自然保護の面からも大きな課題であると考える。そこで今回の登山ではアポイ岳に持ちこまれた植物、すなわち人里植物と帰化植物のようすをみることに重点をおいた。

その結果は、考えていたより持ち込まれた植物は少なく、三合目くらいまでシロツメクサが時折り見られ、五合目付近の監視小屋のまわりにオーチャードグラスが見られた程度であった。しかし、人里植物の王者ともいうべきオオバコは、山麓から湿った黒土のあるところには点々と見られた。一九二八年の館脇先生の報告では、オオバコについては「アポイ山山麓に見る」とされているが、それ以降少しずつ登ってきたらしい。

ご承知のようにアポイ岳山頂はダケカンバに囲まれた裸地になっているが、ここに生えていたのは、まぎれもなくオオバコであった。登山靴の底にわずかに付いたオオバコの種子が発芽したのにちがいない。アポイ山頂を代表する「高山植物」がオオバコであったことは大変がっかりしたが、一木一草たりといえども手をつけられない天然記念物に指定されている山で、この侵入者をそのままにしておいていいものか、抜きとるべきかハタと迷ったのである。

ふと見あげると、「抜きとると文化財保護法で罰せられる」という看板が、デンと立っている。

(二) たった一株のヒメカユウ

——羊ケ丘から消えていく植物——

国道三六号線から百メートルもはいらない沢沿いに、小さな水たまりがある。このなかにヒメカユウ（Calla palustris L.）が

一株生えている。くわしく調べればほかにもみつかるかもしれないが、いまのところ羊ケ丘ではここだけである。この植物は学名でわかるとおり園芸植物のカラーと同属で、日本に自生するCalla属はこれ一種である。カラーやミズバショウとちがって全体が小さく、株にならずに水中に長い茎を出して小型の花をつける。実物を見るには、北大植物園の売店の横にある池の中に多数繁茂しているので都合がよい。

羊ケ丘のヒメカユウは、細々と生きつづけているだけで、いっこうに増える気配がない。しかも、この水たまりは年々汚れてくるし、乾いてきている。周辺にはエゾヨモギが群落を広げつつある。昔はたくさんあったものがかろうじて生き残ったものか、あるいは偶然よそからきて定着しただけのものであるか不明だが、北方系のサトイモ科の植物であるヒメカユウが、羊ケ丘から姿を消しつつあることはたしかである。

羊ケ丘には、この植物を含めてサトイモ科の植物は、次の五種類がみられる。

ミズバショウ (Lysichiton camtschatcense (L.) Schott.)

ザゼンソウ (Symplocarpus foetidus Nutt. var. latissimus (Makino) Hara)

ヒメザゼンソウ(S. nipponicus Makino)

ヒメカユウ (Calla polustris L.)

ココウライテンナンショウ (Arisaema japonicum Blume var. atropurpureum (Engler) Kitamura.

これら五種のうちヒメカユウ以外は羊ケ丘でもふつうに見られ、いまのところ減少することはないと思われる。ヒメザゼンソウは花期が夏で、そのときには葉が枯れており、他の植物が伸びているなかに咲くので見つけるのがむずかしい。

札幌にあって自然の豊かさを誇る羊ケ丘でも、こうしたしいたげられた植物があることに目を向ける必要があろう。このほかにも、タニギキョウやエゾリュウキンカも減少傾向にあり、こういうものを通じて自然環境の変化を知ることができる。

（羊ケ丘自然愛好会）

四季

城殿博

もう三年あまり前のことになるが、私は網走にほど近い小清水町の海岸にとり残された一軒家で、丸一年近く過したことがある。その後も期間の長短さまざまではあるが、毎年出かけることにしている。

当時、鳥の種類も満足に知らなかった私は、野鳥の豊富なこの地にしばらく居すわれば速やかに多くの鳥を観察し、さらに熟知できるなどと不遜な考えを思いつき、早速実行に移した。数キロ離れた海沸湖からは、風とともに北への旅立ちを直前に控えたオオハクチョウの甲高い叫びが、私の耳にも響いてきた。この地ではハクチョウ達の渡来が冬の訪れを告げ、その渡去が春を知らせる。人々はこの鳥の姿を見、声を聞いては一時（いちじ）の休息を得る。

白鳥の群舞が去った後、足早に、原野はそれまでのすさんだ荒地から明彩色の緑野に衣がえして、様々の夏鳥たちを迎え入れる。鳥たちが歌いはじめる頃になると、それと呼応したように草花が咲き乱れ、一年のうちで最も華やかな季節が訪れる。それはあたかもこの地の生きとし生けるものがすべての情熱をこの短い一瞬に注ぎ込んでいるかのようである。騒々しいほどに恋の季節を謳歌した鳥たちも、子供達ともども冬を越すべく温暖な南の地に去っていく。彼らのいなくなった後には、もの悲しいほどの静寂がしばらくの間つづくけれども、これもオオハクチョウの響きのある軽快な声で活気をとり戻す。

毎日が似たりよったりの生活のくり返しの中で、私たちはつい季節感に対して無頓着になりがちである。

ある知人いわく、「一ひらの木の葉の舞うを目にして感じず、一むれの葉が散り丸裸の樹にはじめて気づく」。何も詩人とか俳人になれというのではない。豊かな感受性を持てというのである。

したがって、四季折々の移りかわりに気づき、繊細な感受性を養うには、やはり街中では少し無理のようである。

小清水との関わりも依然としていまもつづいており、これからも当分つづくことであろう。私がこの地で得た最大の成果は、四季をカレンダーではなく、生きとし生けるものの営みの中に見出したことである。以来、一ひらの葉に涙を流せるよう努めている。

（北海道大学農学部応用動物学教室）